女性の不平とよろこび

岡本かの子

女が、男より行儀をよくしなければならないということ。

人前で足を出してはいけない、欠伸（あくび）をしてはいけない、思うことを云（い）ってはいけない。

そんな不公平なことはありません。女だって男と同じように疲れもする、欠伸もしたい、云い度（た）いと思うことは沢山（たくさん）ある。疲れやすいこと欠伸をしたいことなどは、むしろ男より女の方がよけいかもしれない。それだのに、なぜ、昔から男は、食後でも人前でも勝手（かって）に足を出し欠伸をし、云い度いことも云えるのに、女にそれが許されないのだろう。

外側をためてばかりいると、内側の生命が萎縮（いしゅく）してしまう。

男が伸々（のびのび）と拘束（こうそく）なしに内側の生命を伸（のば）す間に、女は有史以来圧（おさ）えためられてそれを萎縮（いしゅく）されてしまった。

生理的から観（み）ても、女の肉体は男より支持力に堪（た）えがたい、乳房の重み、腰部（ようぶ）の豊満（ほうまん）、腹部も男より複雑であります。

殊（こと）にこの特長の発達している私には食後の大儀（たいぎ）なこと、客人（きゃくじん）の前の長時間などは、つくづくこの女子にのみ課せられた窮屈（きゅうくつ）な風習（ふうしゅう）に懲（こ）りて居（い）ます。

この頃ではこの議を随分（ずいぶん）自分から提唱（ていしょう）して、乱れ

ぬ程度でこの女のみに強いられた苛酷な起居から解放されて居るには居ます。思い出しました。四五年前の与謝野家の歌会の時、その座のクインであった晶子夫人が、着座しばらくにして、上軀を左方に退き膝を曲げてその下から一脚を曲げて右方へ出されました。夫人特有の真白い素足が、夫人の 濃紫 の裾から悠々と現われました。

　夫人は、これだけのムードを事もなげな経過ぶりで満座のなかに行われたのであります。そして石井柏亭と平気で談笑して居られました。

　達手で自由で宜い、と私は傍で思いました。いかに

も文明国の、そして自由な新時代の女性としての公平なポーズ（姿態）だと思いました。

ただ、女は何と云っても、男より、外観美を保たなくてはいけない、これは理屈より審美的立場から云うのです。で、如何に、挙措を解放するにしても、常に或程度の収攬を、おのずから自分の上に忘れてはいけません。

美的な放恣、つつましやかな自由、それはどうあるべきかと追求されてもこまるけれど、とにかく以上の字義どおり何れの女性も心術として欲しい、結果はおのずから達成せられるでありましょう。

女も男と同じように働き、学び、考える時代となり、尚(なお)上述の条件を男子側より否定されるならば、永遠に、女性の生命は内面の不平を堪(こら)えて男子を羨(うらや)み続けるでありましょう。

女性のよろこびを考えるうちに「化粧」が思い浮べられた。

男でも化粧する人はある。しかしそれに凝(こ)ったにしても到底(とうてい)女の範囲(はんい)にまで進んで来ることは出来(でき)なかろう。

女でも化粧しない人がある。化粧しないでも美しい人がある。しかし、そういう人はまれである。そして、

そういう人も化粧すればなお美しくなる。そして、そういう人も年が三十にかかればどうしても化粧の手を借りなければいくらか醜くなる。

化粧するのが面倒でしないのは仕方がない。化粧しないでも美しいと自信をもって、しかもしないことを平気で居て、他人のすることをまた他人の仕業として平気に眺めて居るのはいいが化粧しないのを自慢にしたり、他の女がするのを軽蔑したりするのは愚である、傲慢である。女性の何人も化粧をするのは好い、可憐である。美女は美女なりに、醜女は醜女なりに、いかにも女性の心の弱さ、お洒落さ、見栄坊であるこ

とを象徴して好い。
美女が化粧えば一層の匂いを増し醜女がとりつくろえば、女性らしい苦労が見えて、その醜なのが許される。
ともあれ、女と生れた大方の女性にあって、着物の柄、帯の色、おしろい眉ずみ、口紅を揃えてしばらく鏡の前のよろこび（それにいらだたしさもどかしさは交るとも）女にのみ許されたそのよろこびを経験せぬものは少ないでしょう。

底本：「愛よ、愛」メタローグ
１９９９（平成11）年5月8日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社
１９７６（昭和51）年発行
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００４年３月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。